

困った様子で帝人が言い淀む。そんな彼も可愛い。世界で一番、誰よりも。

ひどく幸福な気分で、静雄は待ってる、と言葉を紡ぐ。「けど、あんまり待てねえぞ」

本当は、今すぐに手を出したい。もう一度抱いて、彼は真実自分のものだと言人に刻みつけて、思い知らせてやりたい。自分が逃げられないように、彼ももう逃げられないのだ、と。

そんな衝動を今、静雄は押し殺している。さすがにそんな事実を知らせたら怯えるだろう。それは本意ではなかった。

「……できるだけ待っててください」

「わかった」

その『できるだけ』が帝人の予測より遙かに短い可能性もあるが、それは仕方のない話だ。

静雄なりに努力したと告げれば、きっと帝人は怒ったとしても最後には許すだろう。先ほどと同じように。

抱きしめる力を少し緩め、代わりに顔を傾ける。静雄の意志を理解したのだろう。帝人がそつと目を閉じる。少し、体が震えているのは恐怖が残っているからだろうか。そう思っても、離してやれないし、止めてもやれない。

それが自分の恋だった。

もう、知らなかった頃には戻れない。未確認だった感情は結論を導き出してしまった。———あとは、ただ彼に溺れるだけだ。どこまでも。

そんなことを考えながら唇を重ねる。触れるだけのそれは、まるで何かの誓いのようだ。

たとえば、この恋の永遠を。

そんなことを思いながら唇を離し、静雄は小さく笑う。

そんな静雄を見て、不思議そうに帝人も笑った。

END